

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

【事業所概要（事業所記入）】			
事業所番号	4292200021		
法人名	社会福祉法人 五島会		
事業所名	グループホーム福美荘		
所在地	長崎県五島市大荒町1211、1208-2		
自己評価作成日	令和 3 年 6 月 13 日	評価結果市町村受理日	令和3年8月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/42/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号HACビル内
訪問調査日	令和3年7月6日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者一人ひとりのストレングスに着目し、得意分野は生活の中で発揮できる場面を作り、自信を持つことができるように支援している。
また、集団特有の協調性を活かし、集団で何か一つのことに取り組む、経験のないことにも挑戦してみようという気持ちを持ってもらう機会を意識して作るようにしている。
更に、同じ活動を繰り返す中で、自分の役割意識を持って積極的に活動する意欲に繋げることで、その人らしい暮らしが実現できるよう、支える手と心にやさしさを添えてケアにあたっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は法人理念に基づき介護目標を立てており、更に法人クレドを意識しながら、日々の支援に努めている。また、業務改善計画を作成し1年間の目標を立てるなど、理念の具現化への工夫が確認できる。職員は利用者一人ひとりの得意なことやできることを抽出し、ケアプランに落とし込み生活の中に活かすよう工夫している。ケアプランはポジティブプランを基本としている。新型コロナ禍であっても、馴染みの関係が途切れないう窓越しでの家族との面会、医療機関の駐車場での待ち合わせ等、さまざまな配慮がみられる。一日の中でも楽しみである食事は、職員がその日の冷蔵庫にある食材を基に、利用者の希望を聞きながら調理しており、家庭さながらの様子が窺える。利用者と職員が介護される側、介護する側を超えて、一緒に過ごしている雰囲気から、職員が利用者の尊厳を大切にしたい支援を重視していることがみえる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念と共に五島会独自のクレドを唱和し、意識の統一を図っている。コロナ禍だからこそ、家族に代わって、心の平穏を維持していただけるよう、目配り・気配り・心配りをより意識して日々のケアにあたっている。	事業所では、法人理念に基づき介護目標を立てており、更に法人クレドを意識しながら、日々の支援に努めている。新入職員には法人オリエンテーションの際に理念、クレドを説明している。また、業務改善計画を作成し1年間の目標を立てるなど、理念の具現化への工夫が確認できる。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍でもできる地域交流をとの視点で、清掃活動参加は継続。また、感染対策には十分留意しながら、回覧板のお届けなどは利用者と一緒にに行っている。	現在は控えているものの、新型コロナ禍以前は、保育園、幼稚園、小学校等からの訪問があり、利用者の楽しみとなっており、収束後には再開予定である。現在は散歩時に近隣住民と挨拶を交わしたり、道路の清掃活動に参加すると共に玄関外で回覧板を渡し、地域と交流している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	定期的に研修会を実施した(コロナ禍にて施設内研修のみ。)昨年は五島市主催の事例発表会にて、当施設の取り組みを発表することが出来た。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナの影響もあり昨年度は施設での開催が2回。4回は書類送付にて対応した。日頃は島内在住の利用者家族に参加の協力をいただいていたが、書類送付での対応時には全ご家族へ書類送付しご意見等をいただく形をとったことで、推進会議の周知・啓発につなげることができた。	昨年度は、11月と3月に会議を開催しており、その他は書面会議であることが議事録から確認できる。書面会議は、委員や家族に資料を送付し、意見等のメッセージ欄を設けた確認書の返送を得ている。資料を家族にも送付することで、運営推進会議について理解を得るきっかけになっている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	昨年度はコロナの影響もあり、推進会議を通しての関わりが主となったが、書類等を通して、施設の実情については報告できた。	制度上の変更点などは法人本部を通して情報を取得している。新型コロナ禍で、例年のような質疑応答は行えず回数も減少しているものの、事故報告は直接、行政担当課に出向いている。また、実務者研修がオンラインで行われており、職員数名が受講している。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	研修、身体拘束適正化検討委員会を定期的に実施。その中で禁止となる具体的な行為については学んでいる。スピーチロックに関しては、自覚しにくい拘束と意識し、職員同士がアドバイスし合える関係を持てるよう努めている。	毎月全職員が参加し、身体拘束廃止検討会議を行うと共にグレーゾーンと思われる支援については随時検討している。また、定期的な内部研修も確認できる。スピーチロックは都度注意喚起し、言い換える言葉を共有している。更にチェックリストを用いるなど、徹底していることがわかる。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	拘束同様に虐待に関しても研修や検討委員会を定期的に実施。教科書的な学びに留まらず、現在の施設の利用者を具体例として、対応の難しいケースは特に意識して対応の仕方を都度検討するようにしている。			

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護等に関わるケースはなし。必要となった場面で迅速にサービス活用につなげられるよう、制度の理解に努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	説明者は事務的な契約にならないよう、ご家族や利用者本人の想いを汲みながら、細やかな説明に努めている。また、不安や疑問が生じた時点でも構わないので、なんでも尋ねて欲しい旨お伝えし、入所後も都度、丁寧に対応できるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	電話や面会時等、質問等にはその都度応じている。コロナ禍で面会の制限もあるため、状態変化等は電話で詳しく状況説明を行うようにしている。定期的に現状報告(ホーム便りやスナップ写真など)を行うよう努めている。	新型コロナ禍で、家族の面会が制限されているため、以前のように家族と直接話をする機会は減っているものの、玄関先での面会時には、不安なことなど相談にのることを伝えている。また、毎月利用者の写真と手紙を家族に送付する取組みを新たに始めており、家族の安心に繋がっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常的に管理者へ職員の意見を伝えることができており、必要に応じて管理者から代表者へ意見を伝えることができている。	年に1、2回実施している管理者と職員の面談の際には、事前にアンケートを実施し、仕事上の悩み等を聞き取っている。朝の申し送り時には、職員間で活発に意見が出ている他、職員会議の議題を広く職員から集める取組みもあり、運営に関して職員の意見を反映する体制が整っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎年の昇給、賞与など職員の就労する上での励みとなっている。また、処遇改善加算等、職員の向上心、働きがいを上げるための対応もあり、満足感をもって就労できている。また、職員の健康に関しても意識が高く、健康診断やワクチン接種、検査等、積極的な働きかけがある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は、管理者や主任等を通じて、職員一人ひとりのケアの質の向上を意識し、指導や助言を細やかに行ってくれる。研修に際しては必要な資料を提供し、学ぶ機会を作っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	今回、3名の職員が実務研修に参加できた。コロナ禍で、外部の同業者等との交流の場は持たない現状だが、法人内でのネットワークを、代表者が中軸となり繋いでくれている。今年度に入り、母体法人の職員とグループホーム職員を分けることで、合同研修が実施できた。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	自宅から、施設からなど入居者の状況はそれぞれだが、新しい環境に入るといった点ではおなじなので、常に新たな気持ちでの受け入れを意識している。利用者本人が、話をしやすい雰囲気を作ることをまず意識するようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	できる限りこれまでの生活に近づけるため、ご家族から生活歴等を詳しく伺うよう努めている。自宅からの入所ケースに際しては、自宅でのご家族の苦労なども伺い、労いながら、今後の生活を始める中で、安心してご家族の生活を続けていただけるよう、まずは安心感を感じてもらえるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	アセスメントを慎重かつ丁寧に行い、初期の課題を検討、暫定プランを開始させている。入所からの数週間は、生活サイクルや食事、排泄の様子、基本バイタルや本人の生活習慣や癖などを観察し、全体像を把握した上で、本プランへ適切につなげていけるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人のストレングスを、本人主導で暮らしていただく中で早期に発見し、生活の中での自身の役割ごとを見出せるよう努めている。小さな可能性からの関わりで、これまで習慣のないことができるようになったケースもある。また、昔取った杵柄で、活き活きとした生活を取り戻したケースもある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	これまでのご苦労も伺いながら、家族の思いを汲み取り、立場に立って、できることを考え対応している。利用者にとって、ご家族が一番大きな存在、支えであることを折に触れ伝えながら、面会や電話協力など、共に支える関係を作っていくよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍、行動が制限される中で、状況をみながら、家族との面会機会を数回設けることができた。受診の予定を事前にお伝えすることで、受信先へ会いに来てくださる家族もあった。	新型コロナ禍のため、家族との面会を制限しているものの、窓越しの面会や玄関先で距離を保った上で会う等工夫し、馴染みの関係を継続するよう努めている。また病院受診日を事前に知らせ、駐車場で対面できるようにしたり、スマートフォンに動画を送信したりとさまざまな配慮を行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の波長もあるので、気の合う人同士は一緒に過ごす時間を持てるように、交流の場を支援した(花札や会話交流など)。入居者によっては、トラブルになるケースもあるので、適度な距離感を持って、トラブルに至ることなく、双方が穏やかに過ごせる環境作りに努めた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も、連絡を取り合うご家族も多い。施設との関係を大切に下さるご家族の愛情に感謝しつつ、周りで介護関係の情報が必要としている人が居る等のお話があると、サービスにつなげるまでの流れなどをお伝えするなど、配慮している。入院等による契約解除に際しては、退院後の対応についてもフォローし、安心して治療に専念できるよう配慮している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人の想いを尊重し、可能な限り希望を実現できるようにしている。意思を伝えることが難しい方に関しては、ご家族とも相談しながら、本人の想いを汲みとる努力をしている。できることはできるだけ迅速に対応している。	職員は利用者との会話で、食べたいものの話の他、さまざまな情報を得ている。初めて聞く話題は職員間で口頭で伝達すると共に、業務日誌に記載している。ただし、以前は、知り得た本人の生活歴を利用者それぞれのフェイスシートに書き加えていたが、現在は実施していない。	利用者がその人らしく暮らしていくためには、思いや意向を把握して、職員間で共有することが重要であるため、以前実施していたフェイスシートへの書き込みを再開する等の取組みに期待したい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前聞き取りや訪問も行っている。施設から入所のケースは現状の把握はできるが、過去の情報に関してはご本人との会話の中で知る部分も多いので、日常会話の中で自然と話を伺うことができるように、早期の信頼関係構築を目指している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	まずは見守りを基本とし、できるところと支援を要するところを見極め、過剰ケアにならないよう注意している。生活の中で見えた一人ひとりのタレントやストレングスは職員間で情報共有し、有する力を発揮できる環境づくりに努めている。台所作業や工作活動、家事全般のお手伝い作業など、それぞれの役割が持てている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	アセスメント、カンファレンス、モニタリング・評価を都度、全職員で検討・情報共有しながらプラン作成につなげている。ケア方法については職員個々のケア方法の中でより有効的なものやご本人が喜ぶもの、楽しんでできるものなど、総合的・多角的な視点で検討し、統一したケア、方向性に関わるよう努めている。また、PT・訪問看護師からの助言等をいただける環境にあり、利用者にとっての適切なサービス提供につながるプラン立案に努めている。	新しい入居者には、法人本部支援相談員が先に本人・家族と面談する他、医療機関からの移行はケアマネージャーが面談し情報を収集している。2、3週間の暫定プランを立て、その後評価し本プランを作成している。事業所ではポジティブプランとなるよう心掛けており、プランが本人のやる気や生きがいに繋がるよう努めている。プランは家族の同意を得ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録は、次のケアにつなげていくためのツールとして考え、次にケアを担当する職員がケアに迷わないように、分かりやすい記録となるよう努めている。また、内容に関しては、ご本人の行動記録ではなく、ケアの証を残す場であるとの意識を持って、職員がどう関わったかを残せるように努力改善中である。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	これまで、家族が対応してきた部分も、コロナ禍でできないことが出てきたため、市役所等とも確認を取りながら、代行で申請や更新(自立支援等)を支援するなど、状況に鑑み、柔軟な対応に努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	広報や回覧板を通して、地域のイベント、活動等の把握はできているが、コロナの影響もあり制限される部分が大きかった。災害に備えての準備品など、商品等の紹介を含む対策研修会の案内があり参加の予定であったが、コロナ対策のため中止となった。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	郡部がかかりつけのケースは市内の病院へ変更しているが、その場合は本人・家族の了解・納得を得ている。コロナ禍、ご本人の受診は市中の状況を鑑みながら病院と連携し、スタッフ代理受診のケースが多かった。特別な検査の必要な利用者は、安全に受診できるよう、病院滞在時間を最短にできるように都度、病院との連携を図っている。	従来のかかりつけ医を継続受診している。入院が必要になった際、かかりつけ医に入院設備がない場合は、設備が整った医療機関に移行することとしている。事業所で受診支援した際、薬の変更等家族に結果を伝えている他、緊急時にも連絡している。歯科医の訪問診療があり、利用者が受診している他、昨年度から訪問看護師が毎週訪れ、利用者の健康管理を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	法人母体から週1回の看護師訪問がある(入居者の状態によっては、経過をみるため不定期に訪問することもある)。定期的に看護師の訪問があることや、いつでも対応について相談できる環境にあることで、職員も安心してケアにあたることができている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院に際しては、入院に至るまでの経過の詳しい報告と共に、直近の情報(身体レベル、食事・排泄・入浴の支援状況、疎通のレベル、家族情報など)を適切に伝えることで、退院時のレベルのめやすとなるように努めている。また、普段から、状態の変化を細かに伝えることで、病院からは、観察のポイントや臨時受診のタイミング、内服調整など、施設でできる対応を伺うこともできている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期のケアについては、法人として実施する方針なので、職員は心構えとして看取りケアを行う意思はある。癌を持病に持つ利用者もいるので、必要な時期には、ご本人やご家族と共に、これからの人生の過ごし方について考え、悩みや不安に寄り添いながら対応していきたいと考えている。	契約時に終末期・看取りの指針をもとに説明している。段階を経て看取り支援に入る時に、再度指針について説明し同意書を得ている。夜中に急変した場合は、訪問看護師に連絡し指示を仰ぐこととしており、職員に対する看取り支援の研修は、その段階で集中的に行い、職員の不安軽減に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	可能性として考えられる急変の事態にどう対応するかは、ケースによって研修を行い備えている。受診のタイミングに関しては状況的余裕のあることなので、出勤者や訪問介護への相談も可能だが、救急車要請のタイミングに関しては、夜勤者のみでの判断となることもあるため、ケースバイケースでのシミュレーションは都度、検討を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている。	昨年9月の台風時には老健に避難した。状況によっては、避難後、すぐに施設に戻れない可能性（例えば施設のガラスが割れる、戻りの道が通れない、建物が倒壊など）もあることを視野に、避難時の持ち出し物（特にお薬等）については備えの視点で検討していきたい。	年2回、消防署立会いの総合訓練を行っている。また、毎日自主検査チェック表を付けている他、全居室に非常持ち出し品を準備し、浴槽に水を張るなどできることを考え実行している。夜勤者や新入職員は優先的に夜間想定訓練を受けるよう指導しており、利用者の安全確保に努めている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシー保護に関する研修を実施している。一度発した言葉は消せない、一言一言の言葉の重みを常に考え、利用者を一人人として尊重し、また、目上の方として敬い対応することを意識している。	職員が利用者と呼ぶ際は、苗字にさん付けを基本としている。便りに使用する写真について、家族に書面で同意を得ている他、打ち合わせ時のメモは、シュレッダーにて処理している。また、面会簿は各居室毎に置いており、個人情報への配慮が窺える。ただし、利用者の介護記録簿の背表紙の文字が大きく、利用者にも見える状況である。	利用者一人ひとりの尊厳、プライバシーを尊重する基本に立ち返り、ファイルの背表紙の文字の大きさだけでなく、保管方法等、検討し取り組むことに期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	集団生活の中で、周りの入居者や職員を気遣う思いから、我慢や遠慮に繋がっていないか、自身のことを後回しにしていないか、想いを十分に伝えられているかを意識しながら関わりと観察を行っている。職員の存在も、利用者の生活にとって環境の一部であるということを意識し対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食べたい物ややりたいことを確認しながら、希望を実現できるよう配慮している。希望のメニューを食事に取り入れたり、工作活動では、自身で材料選択してもらったりしている。お手伝い活動も積極性、自主性がみられており、自身の役割として定着させているケースもある。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時、起床時など、更衣のタイミングでは、自身で準備できる人はご自分で、難しい方は職員と一緒に、確認をしながら選ぶようにしている。購入支援の際は、本院の好みを尊重し対応している。サンプルを借りて選んでもらうこともある。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理に参加することで、更に食事が美味しく楽しいものになるよう配慮している。日常的な下ごしらえの手伝いや下膳、テーブル拭きなどができている。また、季節を感じられるような旬の物の皮むきなどは全員で行う。おやつ作りは直接火を必要としないホットプレートを活用することで、全工程を利用者で行うことができている。	食事は、職員が利用者に希望を聞き取り調理しており、家庭と同様の雰囲気がある。調理の下ごしらえの段階から利用者が参加する他、菜園では利用者が職員と共に季節の野菜を栽培している。中庭やオードブル形式での食事会や手作りのうどん、干し柿、団子と食事が豊かなものとなるようさまざまな工夫を行っていることが見てとれる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	定期的な内科での検査で特別な指導がある場合は、不足しているものを補うために、接種すべき食材などをリサーチし、食堂に掲示して、調理担当職員が意識しながら調理・配膳を行っている。糖尿病の方に関しては、主食量を計測し、主治医からの指示に従って提供。病気の悪化なく、安定した経過がみられる。また、全て制限するのではなく、イベント食はみなさんと同じように食べられるようにしている（主治医の許可の下）。また、今年度からは、母体老健の栄養士からの指導も始まり、適宜、現状に即した必要な助言・指導をいただきながら、適切なケアにつなげている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを支援している。機能を活かし、自立できる部分は継続できるように声掛け、見守りを行っている。夜間の義歯管理は職員で行っているが、起床時の義歯装着は、可能な限りご自身でしてもらっている。口腔内の不具合が生じた時は、連携病院に連絡し訪問治療開始するなど、連携が取れている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	夜間は、安眠へ向けた対応を考慮するが、日中はトイレでの排泄を基本とし、自ら訴えることが難しい方に関しては時間をみながらトイレ誘導を支援している。身体自立の方は排泄ケアへの抵抗もあるので、適度な距離感を持って接し、適切なタイミングで必要なケアができるよう配慮している。日中の失禁現象に繋がったケースもあり。	排泄チェック表に記録することにより、利用者一人ひとりのパターンを把握し、早めの誘導を行っている。声掛けは、利用者の耳元でそっと行っている。昼間は、トイレでの排泄を基本としている。更にパッドの種類の検討も職員間で行っている。その結果、おむつからリハビリパンツへ、リハビリパンツから布パンツへと改善した事例がある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘に関しては、単に薬に頼るのではなく、十分な水分、夜間の睡眠、日中の適度な運動、食事時の咀嚼状況等、全体的に観察・検討しながら、できるだけ安楽でスムーズな排便につなげられるよう配慮している。また、水分の一つとして、朝のセンナ茶を活用した便秘対策もあり、効果を見せている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しむように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本は希望に応じることができている。下肢のケアなど（水虫治療中等）、順番への配慮が必要なケースはその都度検討、適切に対応できている。午前、午後など、その時の状況によって対応。逆に、本人からの拒否があれば無理強いせず、翌日に再度声掛けするなど、柔軟に対応している。	入浴は、週3回の頻度である。介護度が高く浴槽に浸かることができない場合は、足浴とシャワーを組み合わせ、体が温まるよう配慮している。菖蒲湯や入浴剤で入浴が楽しいものとなるよう工夫している。時間や入浴剤の有無、湯温も一人ひとりの好みを聞き取り対応しており、本人本位の支援である。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	高齢の方の日中の休息の必要性について理解し、活動と休息のバランスを考えながら、柔軟に対応している。日中の傾眠傾向がみられていた方で、日中に決まった休息時間（臥床）時間を作ったことで、覚醒時の活性化が図られたケースもある。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服、点眼、塗布薬、貼布薬などは把握できている。また、変更や中止に際しては、個別の記録だけでなく申し送りノートや処方変更ノートなどを利用してこまめに確認できるようにしている。朝の申し送りやカンファレンス、モニタリングなどのタイミングでも再度の確認を行うようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	畑作業、家事全般のお手伝い、季節の飾り作り、花札、カラオケなど、慣れ親しんだものや、施設に来て初めて挑戦したことなど様々だが、利用者が楽しんだり喜んだり「またやりたい」「今日もやる」と前向きに希望を伝えられるような活動を提供できている。活動を通して、発語の少なかった利用者が、少しずつ話すようになったケースもある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍、市中へ出かけられる機会は減ったが、車でのドライブはできた。また、敷地内・近場の散歩や畑での活動、外での食事会などを行った。	日常では、事業所の周辺の散歩や畑作りで、外気に触れる機会を作っている。新型コロナ禍の中で、以前より外出の機会は減っているものの、近隣の公園に菜の花やコスモス見物にドライブに出かけている。園庭での食事会も数回催しており、職員は、利用者の楽しみを作り出すよう工夫している。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個別に預り金を預かり施設で管理しているが、自動販売機で飲み物を買う時などは、ご自身でお金を入れて買ってもらうようにしている。散歩を兼ねて外に出て、敷地内の自動販売機で一人ひとり好きなものを購入してもらったこともあった。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	現在、手紙を書く人はいないが、電話交流は積極的に行っている。家族からの電話も繋いでいる。特にコロナ禍で面会の制限があるため、家族にも電話協力をお願いしている。家族から、定期でお手紙が来る人もいる（読むことが難しく、職員が代読している）。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	廊下で、お互いの居室を訪問し、廊下歩行運動を一緒にしながらなど、思い思いに利用者同士の交流があるので、自由に過ごすことができるよう、廊下に障害となる物は置かないようにしている。温暖差に関しては感じ方もそれぞれなので（現在換気が定期的に必要状況なので）、室温等をこまめに確認しながら調整配慮している。	玄関、廊下、リビングなどすべての共有空間は、掃除が行き届いており、清潔保持は利用者の快適な生活を保障している。台所と食堂は一体的で、調理の音や匂いなど家庭的な空間である他、リビングにはいくつかのソファが並び、利用者は思い思いの場所でテレビを鑑賞したり、互いに談笑する姿が見える。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	基本は自由に移動してもらい、会話や活動等、場面場面に応じ、対応している。また、移動自立の方、移動に支援を要す方等の席を自己やトラブル予防を視野に、十分配慮対応するようにしている。トラブル等で席替えの必要がある場合は、双方に理解・納得いただける説明を行い迅速に対応するよう努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	できるだけ使い慣れた物や馴染みのある物を持ち込んでもらうように、入所時にはお願いしている。新しいものを購入したり、ご準備いただく時は、都度の説明をしっかりと行い、後の混乱に繋がらないよう配慮している。	居室はテレビや家族との写真などがあり、ベッドの位置など本人が過ごしやすいよう配慮している。マリア像を置いている利用者もあり、入居前の習慣を尊重する事業所側の姿勢が窺える。昼間のみ使用するポータブルトイレには、手作りのカバーをかけ、羞恥心への配慮を行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	要所には、場所認識ができるようなイラストで表示物を設置。新規入所の方でも、長くせずに建物内の配置を覚えることができたケースもある。また、入浴後のドライヤーなどは、できる範囲を見極めさり気なくフォローをすることで、自分で髪を乾かししたり、他者のお世話もできているケースがある。		